武蔵野日曜聖書講筵

罪人の首

――テモテ前書第１章12～17節――

１９９３年２月21日
小池辰雄

罪びとの首　親鸞一人がためなりけり　内村鑑三「罪びとの首」私は例外者　それが大きな交響楽になる

【テモテ前1】

12我に能力を賜う我らの主キリスト・イエスに感謝す。13われさきには瀆す者、迫害する者、暴行の者なりしに、我を忠実なる者として、この職に任じ給いたればなり。われ信ぜぬ時に知らずして行いし故に憐憫を蒙れり。14而して我らの主の恩恵は、キリスト・イエスに由れる信仰および愛とともに溢るるばかりいや増せり。15『キリスト・イエス罪人を救わん為に世に来り給えり』とは、信ずべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中にて我は首なり。16然るにわが憐憫を蒙りしは、キリスト・イエス我を首に寛容をことごとく顕し、この後、かれを信じて永遠の生命を受けんとする者の模範となし給わん為なり。17願くは万世の王、すなわち朽ちず見えざる唯一の神に、世々限りなく尊貴と栄光あらん事を、アァメン。

●罪びとの首

テモテはパウロの特別な弟子です。

12我に能力を賜う我らの主キリスト・イエスに感謝す。

パウロは全く、

「福音は力なり」

と言って、キリストの力で動いていました。

13われさきには瀆す者、迫害する者、暴行の者なりしに、我を忠実なる者として、この職に任じ給いたればなり。われ信ぜぬ時に知らずして行いし故に憐憫を蒙れり。

パウロはクリスチャンを殺したりしたから、自分はこういう悪いやつだったと。

14而して我らの主の恩恵は、キリスト・イエスに由れる信仰および愛とともに溢るるばかりいや増せり。

「キリスト・イエスに由れる信仰」の「由れる」とは、

「キリスト・イエスが我々の信仰や愛の原動力だ」

という意味です。こっちが信じているではない。信仰を賜(たまわ)るんです。

15『**キリスト・イエス罪人(つみびと)を救わん為に世に来り給えり**』とは、**信ずべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中にて我は首(かしら)なり。**

私は一番悪いやつだ、と。

16**然るにわが憐憫を蒙りしは、キリスト・イエス我を首に寛容をことごとく顕し、この後、かれを信じて永遠の生命を受けんとする者の模範となし給わん為なり。**17**願くは万世(ばんせい)の王、すなわち朽ちず見えざる唯一の神に、世々限りなく尊貴(とうとき)と栄光あらん事を、アァメン。**

パウロは、ここで彼自身もふれているように、クリスチャンを迫害した。そうしたら、復活のキリストが現れて、

「**サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか**」

と、やっつけられて、ひっくり返された。正直、パウロというのは自我の強いやつなんです。そして、律法をかさにして、

「キリストは、新興宗教はけしからん！」

というわけで迫害した。ところが、だいぶんキリストを信ずる者が迫害を受けたので、復活のキリストが現れて、

「**何ぞ我を迫害するか！**」

と、やっつけられた。悪人なんだ。極悪の、マイナスのすごいやつが、逆にプラスのすごいやつに変えられる。

「**罪びとの首(かしら)**」

と自分でパウロは正直思った。

「私は一番悪いやつだ」

と。ところが、ひっくり返ると、今度はパウロはキリストの第一の弟子となった。マイナスが強いとプラスがまた強くなる。どん底から天にあがってしまう。こういう現象がよくある。

内村鑑三先生がそうです。先生は自分自身をもてあましている、

「私はいろいろな癖があって悪いやつだ」

と。性格の強い方ですから、とても烈しい。手島さんもちょっとそういうところがあった。自分を吐きすてるように彼も私に言ってました。だから、本当に彼は平伏した。それでひっくり返った。

マイナスの極致から今度はプラスのすごいところに転換する、変わる。片一方の十字架の盗賊が――もう片一方は悪いやつなんだけれども悔改めない――

「俺は本当に悪いことをした。まん中にいる十字架のひとは少しも悪いことをしないのに、十字架にかかった。私たちは十字架に懸かるのは当然だ。せめても、御国にいらっしゃるときに、おぼえてください」

と、そこで魂の平伏しの告白をした。

「お前は、今日、私と一緒にパラダイスだ」

と、キリストは仰った。片一方のこのマイナスが、これがいきなりキリストと一緒に天界へ行った。

「今日、お前は私と一緒に天国だ」

と。

私は今、詩を書いている。この詩は私は普通の現実で書いてない。霊界で書いている。そこから普通のこの現世を見ている。そういう立場で私は詩を書いている。そうすると、この霊界にいろんなひとがやってくる。それと会話したりする。

ダンテは地獄に行って、それから煉獄を通って天国に行くという構造で書いた。私はいきなり霊界にいて書いている。しょうがない、そういうようにさせられているんだから。また、それでなければ書けないから。

●親鸞一人がためなりけり

親鸞も、

「自分はしょうがないやつだ。俺は煩悩のかたまりみたいで、どうにもならん」

といった。

「一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしということ。

八十億劫の重罪もパッと救われると。

この条は、十悪五逆の罪人、日ごろ念仏をもうさずして、命終のとき、はじめて善知識のおしえにて、一念もうせば八十億劫のつみを滅し、十念もうせば、十八十億劫の重罪を滅して往生すといえり。」（『歎異抄』第14条）

「聖人のつねのおおせには、『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ』と……」（『歎異抄』末文）

この言葉が非常に大事なんです。

「お釈迦さんの言葉はみな結局、私一人のためだった」

と。

「親鸞一人がためなりけり」

という、この告白は非常に大事なことです。

パウロの中にはそういう言葉はないけれども、パウロもまた全くその通りです。ローマ

書7章に、

「**この死の体（からだ）より我を救わんものは誰ぞや。イエス・キリストの故に感謝す。**」

とある。

「あの人はどうだこの人はどうだなんて、横を見ているひまはない。そんな比較論は要らない。どうにもならないこの私のために福音はあった。福音は私一人の為だった」

と。

●内村鑑三「罪びとの首」

内村鑑三がまた、そうだった。自分がしょうがない人間だから。正直、内村先生というのはいろんな角がある人でした。けれども、偽りはない。昨日言ったことと、今日言ったことがまるで反対のことを言ったりなんかする。けれども、その瞬間ではとにかく全身的なひとだった。けれども、非常に矛盾が多い。だから、躓く。内村先生から逃げて行った人はいくらでもいる。弟子たちとも喧嘩する。有名な弟子が数人いますが、みな内村先生とぶつかっている。私は大体、藤井先生の場合も知っていますから。内村鑑三というのはそういう厄介な人間なんだ。だから、

「十字架でなければどうにもならない」

といって、内村先生は

「十字架、十字架」

と言っている。けれども、もうひとつ、聖霊の世界にひっくり返れば、もっとすごかったんだけれども、その点は本当に残念でした。内村先生は「十字架」でいいよ、その役割は果たしたから。その内村先生の後でいつまでたっても「十字架」ばかり言っているのはダメなんだ。

内村鑑三も言った、

「**私も罪びとの首（かしら）である**」

と。パウロも散々悪いことをした。クリスチャンを殺したりした。だから、「私は罪びとの首」だと言った。パウロは、

「そのうちで、私は罪びとの首だ」

と比較して言っているけれども、「罪びとの首」という表現は、比較を絶したところで本当のことになる。「極めて悪いやつだ」という。「最も」という字は他のものと比較した場合なんだ。ところが、「極め」てという言葉は絶対的な言葉なんです。

「私は極めて悪いやつだ」

ということ。だから、内村先生は、

「私みたいなやつが救われたのだから、万人は救われる」

と言った。それで、「罪びとの首」だと言ったんです。自分をもてあますような人が、

「本当にしょうがない、十字架でなればどうにもならん」

と。だから、内村先生はあれだけの証しをして、無教会の親玉をつとめた。しかし、

「いつまでも無教会なんて言っているな」

と私はいいたい。キリストの体としての在り方というものははっきり自覚しなければいけない。

いろいろな教会がある。いろいろでいい。在り方はみんなどうせ五十歩百歩で、みんな不完全なダメなんだ。ダメでいい。しかし、

「そのダメな中にキリストがいるか。そこに本当にキリストがいるか。観念でないか、現実か」

ということだけが問題なんです。信仰というのは現実でなければダメなんです。

「キリストを生きる」

という現実がなければ。それでなければ、力がこない、ただ「主さま」と言っているだけでは。

「主さま！」

と言ったら、その時に直ちに自分がキリストの中に入っていなければダメです。

パウロは、そういう悪いやつがひっくり返されて、凄いプラスになってしまった。そういう例はよくありますが、その一つの例は『青の洞門』です。（『青の洞門』の話は省略）

●私は例外者

私は正直、例外者です、いろいろな意味で。私を見て、89歳とは誰も思わない。

「私は何才に見えるか」

と聞くと、大体70才位に見ている。20年くらい若く見えるらしい。大体、私はバカだからね、バカはなかなか歳をとらない。あなた方は、このバカの言うのを聞いてバカにならないでくださいね。何しろとにかく、する事なす事、言う事が例外的ですから、私のマネなんかはしないで、ただ参考にしてください。

けれども、あなた方も一人一人は本当は例外者なんだ。天下にY君というのは一人しかいない。他に例がない。だから、例外者です。本当の個個人というのはみな例外なんです。

キリストは個を尊ぶ。一匹の迷える小羊を谷底まで行ってつかまえようとする。その個を尊ぶ。あとの九十九匹はどうでもいい。個の自覚は、自分を相対的に評価するのではない。

「もうしょうがない、どうにもならないやつだ」

という者がキリストにとっ捕まると、エライことになってくる。さっきのパウロもそうです。ローマ書7章で、

「この死の体より我を救わんものは誰ぞや」

と、パウロは行き詰まってしまった。今度は８章で、

「**主キリストの故に感謝す……**」

と、キリストの聖霊の世界に入ってしまったから、８章は聖霊の大讃歌です。

「**このキリストの愛から我を離すものはあるか**」

と絶叫している。キリストと一つになっている。だから、「信仰」の「仰」の字は、仰いでいてはダメだと私が言うのはそのことです。

「信じ仰いで何になるか。信交、キリストと交われ。霊的な一如の関係に入れ」

と言っている。

「**われキリストの中に、キリストわがうちに**」

とパウロがさんざん言っているのは、正にパウロの「信交」はキリストと一如の関係です。でなければ、これだけのもの凄い伝道もできなければ、これだけの書翰も書けやしません、ただキリストを仰いでいたのでは。ただ任せているのではない。キリストと一緒に動くんです。難行苦行の必要はない。

「キリストと一緒になっているから、キリストの力で動いている。だから、楽しくてしょうがない。我々はいわゆる自分で努力しなくたって、楽しくてしょうがない。楽しくて力がきてしょうがない」

という世界です。自分自身ではどうにもならないやつが、今度は、

「キリストに在る」

というと、楽しくてしょうがない。

人間はその人の一番光っているところを見て交わっていかなければダメですよ。みんな、欠点はあるんだから。

「どうだこうだ」

なんて計算したってダメです。

罪びとの首みたいな、『青の洞門』の禅海和尚は、パウロと同じように人を救うところのエライ禅海和尚になってしまった。パウロも悪いやつだったが、ひっくり返って、マイナスの極致がプラスの極致に変えられた。

さっき言いましたように、

「聖人のつねのおおせには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」

とある。「罪びとの首」というくらいな、

「俺はしょうがないやつだ」

というくらいな自覚をもって、

「キリストでなければどうにもならん」

ということになったら、十字架・聖霊で、逆に本当に聖霊の世界に入れられる。だから、

今度はまた別な意味でしょうがない。人に何と言われようと一向差し支えない。

●それが大きな交響楽になる

いつまでも、

「内村先生、内村先生」

なんて言っていてはダメだ。またそうかと思うと、

「藤井先生、藤井先生」

というやつがいる。「前進しろ」と言いたい。あなた方も、どうぞ、

「小池先生、小池先生」

なんて言わないで、大いに前進してください。みな、バトンタッチしてどんどん進んでいく。みんな一人一人が天下一品なんだから。そしてキリストを証しする。それが大きな交響楽になる。同じことをしたら、交響楽にならない。それぞれ響きが違うんだ。太鼓になるやつは太鼓になる。笛になるやつは笛になる。

どうぞ、そういうことで、皆さん、明るく力強く生きてください。それは、キリストでは明るくならざるを得ない、力強くあらざるを得ない。ざるを得ないです。いわゆる

「信仰、信仰」

なんていって、仰いでばかりいてはダメです、現じなければ。身証する。我々は

「キリストの身証者」

身をもって証しする者である。

「クリスチャン」

なんて言う必要はない。キリストの身証者、証者である。

「汝らはわが証者となれ」

とキリストが言われたでしょ。身をもって証しする。存在をもって証しする。でなければ、生きがいがないですよ。

私は集会の前に、或る準備はしますよ、けれども、いざ語るとなると私は空っぽなんです。そして、上から力がくる。空っぽになってないと、キリストの力が入らないから。それで、キリストと一つとなる。

「よくよく案ずれば一重（ひとえ）に親鸞一人が為なりけり」

とは素晴らしい言葉だ。この言葉が私は大好きなんだ。

「彌陀の本願は親鸞一人のためだった」

という。

「福音は小池一人のためだった」

と、それだけの気合をもって受けとったら、誰でもが凄いことになる。これはいわゆる個人主義的な言葉ではない。間違えては困る。

「罪びとの首みたいなこんなやつが救われたのだから、全くこれに集中してきた。片一方の盗賊のためであった」

と。

「お前は、今日、私と一緒にパラダイスだ」

という。

どうぞ、あなた方の生活が、

「楽しくてしょうがない、力がきてしょうがない」

というようになってください。どんな事がきても、決して負けません。いろいろなことが起きますよ。けれども、そんなことで負けない。もうひとつ次元の違ったところに入ってしまうから。相対的なものがどんなにゴタゴタしようが、いいよ。もうひとつ次元の違ったところにはいって、

「これが私の現実だ」

というところを持ってないと。

とにかく、このパウロがあるから、この福音は伝った。ヨハネだけではダメなんです。その意味で、あなた方はパウロはシッカリと読んでください。決して、理屈ではない。彼は叫んでいる。彼はしょうがない野郎だよ。

「お前はなぜ私を迫害するか！」

と、ひっくり返されたんだ。あのパウロの劇的な回身がいかにもの凄いことであるか。キリストがいかに、

「このしょうがない奴を、頑固な野郎をひっくり返して、本ものにしてやろうか」

と。それが正に、

「我は罪びとの首（かしら）」

とパウロ自身が告白した。ところが今度は彼は、

「使徒の首」

になった。罪びとの首は使徒の首となった。第一の使徒になった。